
つめたい夏の雨

のりあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つめたい夏の雨

【Nコード】

N4247D

【作者名】

のりあき

【あらすじ】

姉と弟の禁断ではない愛情物語り。人の死をひきずる感覚

（前書き）

はじめまして

つたない文章ですが最後まで読んで頂けると幸いです

ぼくは雨が嫌いだ。

特に夏に降る冷たい雨は気に入らない。

夏なのに雨のせいで肌寒く身震いがする

窓ガラスをたたく雨の音が一層強く鳴り響く

あの日の泣きたくなる記憶があたまに浮かぶ

未だに忘れられない、本当はもう忘れるべき姉のことを

7年前、姉は大学にさほど苦勞もなく無事に合格して楽しく通っていた。

姉は子供のころから病弱で何回も入院を繰り返して高校生のときは1年ちかくも入院した

おかげで同級生とははなれてしまい少しさみしい思いもしたらしい。

姉は病院に入っているときはふさぎ込んでいたが、日頃はあかるい性格で特に弟の僕にはとてもやさしかった。

ぼくはそんな姉が好きだった。

姉弟という関係を越える領域まで近付いていた。

それほど仲がよかった。

僕が産まれたころから姉はいつもつききりで、ミルクはおろか恥ずかしいはなしたがおむつがえまでしていてくれたらしい。

いつも思い出したかのような言い方で僕をからかっていた。

それを恥ずかしながら聞いていたが心の中では感謝していた。

そんな話している姉がたまらなく好きだった。

姉に恋心を抱くようになったのは中学に入ったぐらいからだ。

それまでは異性という感覚ではなくやはり姉弟の関係で一緒にお風呂にも入っていたぐらいだ。

進学してからは姉のちょっとした仕草や、ノースリーブから見える

脇の下などにときどきとしてしまい顔を赤らめてしまったこともある。

姉もこちらを意識しはじめたのか付かず離れずと多少距離をおいてくれた。

それでも一緒に買い物に行ったり仲の良さは前よりも深くなっていた。

姉の病気が悪化したのは夏にさしかかったころだ。

梅雨の長雨のせいかわ姉は体調をくずしてしまい、寝込んでしまった。その時はまだ入院するほどでもなかったが、ことのほか苦しかったらしい。

ぼくは学校から帰ったらすぐに姉の部屋に顔を出していた。

自分が出来る範囲内で姉の看病をしたかった。

いやずつと姉の側に居たかったのだ。

ぼくの両親は共働きで母は早くても5時までは帰って来ない。それまではぼくと姉との大切な時間だった。

姉はぼくの顔を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「おかえり。朝よりもましになったよ」

確かに朝見たときよりも顔色はよかった。

まだ熱はあったらしいのだがぼくと話すことで苦しいのが紛れたそうだった。

でもそんな日々は長くは続かなかった。なかなか熱が下がらないために入院してしまった。

当時ぼくは姉の病氣のことをあまり詳しくなかった。

姉は血液の病氣でもう一度再発すると助かる見込みがないと言われていた。

またドナーを待っているのだから姉は滅多にない種類らしくあまり期待できなかった。

そのことも姉が入院してから知った。

姉がいつも語りかけるようにそつと話してくれた。

自分のことをはっきりとわかっていて、なにかこう覚悟を決めているみたいだった。

入院してわかったことだが姉は病気が再発してしまった。

病院は家から近くにあったのだがそう何度も会いにいけなかった。

また姉がくるしんでる姿をみるのは嫌だった。

会えば姉は無理してでもいつものように笑顔で接してくれる。体を起こすのも辛いのに。

姉の優しさに甘えてしまうときもあった。

そんな時にかぎってたわいもない話で終わってしまふ。

ぼくのこころのはからまわり。

その年の夏はそれほど暑くはなかった。逆に肌寒い日もあった。

夏休みに入ったある日、母に姉の荷物を持って行くよう頼まれた。

夏に入って仕事が忙しくなったらしい。

ぼくは姉に会えることがうれしかった

姉は病気のせいでやつれてしまい、苦しみが顔に出るようになった。

それでもぼくが会いにいくと笑顔で迎えてくれた。

その日は体調がいいのかベットを起こして沢山のことを話してくれた。

友達のこと、大学受験のこと、大学生活のこと、看護師さんのこと、

そしてこの時に病気と今後のことまではなしてくれた。

「からだだけは大切にね、約束」と指切りまでした。

それはいまでも守っている。

そして姉はぼくにとってとても大切に一生忘れられないことも話した。

姉はぼくが中学に進学してから変わったと感じていた。でも理由も

わかっていたそうだと。ぼくのころの中までもあの笑顔があることを。

「私はね、あなたが産まれたころから大好きだった」

「あなたはわたしの生き甲斐」

「別に私が産んだわけでもないんだわけでもないんだけど」

「わたしの弟がわたしをたすけてくれる。そういとおしく思った」

「そしてあなたは私をたすけてくれた」

「ぼくはまだなにもしてないよ」

「ううん」そういつて顔をふった

「あなたがいる、それだけで十分」

「わたしのかわりにたくさんさんの想い出をつくって、でもわたしのことも忘れないで」

姉のベットの横で立っていたぼくをよびよせた

そつと姉の手がぼくの首筋にまわり、すつとながれるようにくちづけをかわした。

ぼくは目を見開いたままだった。

するりと姉の手がはなれ短くて永いファーストキスの終わりがきた。

「あいしてる。でもごめんね」姉は涙を流した。

姉のやわらかいキスの感触があたまに残りながらも、流した涙と「ごめんね」の意味を考えた。

その後、姉とは何度も会ってはいるがキスのことは触れなかった。

あの日あのキスを交わしてから2週間後。

姉はぼくたち家族に見守られるなか息をひきとった。

姉が亡くなった日から葬式がすむまでずつとつめたい雨だった。

この日からぼくは雨が嫌いになった。

おわり

(後書き)

パソコンあるのにケータイで書いてみました。むつかしいなあこの
小説は仕事で出張行ったあいだにかきました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247d/>

つめたい夏の雨

2011年1月16日05時02分発行